

■立石一真 技術者、実業家。{立石電機(オムロン)}創業し、オートメーション・システム機械で、世界的企業になった。

たていしかずま
ヒ7/国産化・1900＝ 熊本市、陸軍第六師団の記念品用伊万里焼盃を製造販売する立石熊助・エイの長男に生まれる。

幼時は恵まれて育ったが、

日露戦争終・1905＝ 5歳：

アヲヲ創刊・1908＝ 8歳：新町小学校一年生の時、父が死去して家業が衰退、下宿屋を開業した母を助けるべく、新聞配達を始める。

伊藤博文暗殺1909＝ 9歳： 祖母から業隠精神による躰をうけ、戸主の責任と自覚、強い独立心が培われる。

明治天皇没・1912＝12歳： 大正政変・1913＝13歳：熊本中学に進学し、勉強に野球にと青春を燃焼、

ロシア革命・1917＝17歳：家計も考えて海軍兵学校に挑戦するも、最後の身体検査で不合格となるが、独習した学力に自信を持つ。
本格政党内閣1918＝18歳：熊本高等工業学校に新設の電気科第一部電気化学に進学。

原敬首相暗殺1921＝21歳：卒業し、兵庫県庁に電機技師として奉職、
水平社結成・1922＝22歳：学友の紹介で井上電機製作所に入社、

アメリカで開発された“誘導形保護継電器”の国産化開発に取り組み、このとき身につけた技術が立石電機創業の基礎となる。

金融恐慌・1927＝27歳：

世界恐慌・1929＝29歳：世界大恐慌で不況に陥ったことに、肥後もっこすの反骨精神も手伝って、
海軍軍縮条約1930＝30歳：希望退職。個人で実用新案をもっていた家庭用ズボンプレスをもとに、京都に{彩光社}を設立し、飛び込みで訪問販売。ナイフグライндаを考案して露店販売するなど苦闘するも、電機産業への意欲は高まり、

満州事変・1931＝31歳： 五一五事件・1932＝32歳：*学友の示唆でレントゲン写真撮影用タイマを開発、大阪に{立石電機製作所}設立、社章も自らデザイン。

芥川直木賞始1935＝35歳：当時としては画期的な電気雑誌{OHM}に一ページ広告を載せるなどして、大口注文も得るようになり、
二二六事件・1936＝36歳：西淀川区に大工場を建設、
日中戦争始・1937＝37歳：東京進出を図る。
日米開戦・1941＝41歳：東大航空研究所からマイクロスイッチ国産化の依頼があり、研究を重ねて、
創価学会検査1943＝43歳：国産初のマイクロスイッチの製品化に成功するも、戦争激化のため、商売にはならなかったが、戦後、オートメーション業界のパイオニアとしての評価を受ける基となる。

年金+総武装1944＝44歳：戦局悪化で松竹京都第二撮影所の空きステージに京都分工場を設け、これが戦後の本社工場となる。
敗戦・1945＝45歳：

敗戦後は、“火力の調節できる五徳付き電気七輪”がキャッチフレーズの電热器はじめ、女性のヘアアイロン、マイクロスイッチ応用の蒔絵を施した卓上電気ライターなどを生産して凌ぎ、
*{立石電機}を再建し、新たなスタートを切る。

朝鮮戦争始・1950＝50歳： 独立回復・1951＝51歳：

マイクロスวิตチリレー・温度スイッチ・圧力スイッチなどを開発、販路拡大を図り、
メデー事件・1952＝52歳：わが国の能率学の草分け上野陽一からオートメーション前提論を聞き、西式健康法の創始者西勝造からサイバネティクスという書物を紹介されて天啓を得、決定的展開点となる。
テレビ放送始・1953＝53歳：日本電機工業会が企画した米国中小電機工場視察団にも参加して、初めて渡米。自分の目でオートメーションの実情やパイオニア精神を得て帰国するや、全社的な組織の抜本見直しを図る。この年から、オートメーションの波が押し寄せ、{立石電機}は業界に先駆けて、独自の商品をつぎつぎ開発し、市場を拡大。

自衛隊発足・1954＝54歳： 55年体制始・1955＝55歳：映画界からヒントを得て分権制の経営体を創始すると、評判を呼んで各地からの講演依頼に悲鳴をあげるも、明確なシステムと若手大抜擢が昭和三十年代の大躍進の原動力となり、
国連加盟・1956＝56歳：経済同友会で“経営者の社会的責任とその実践”をテーマに研究し、企業の社会奉仕の意義を明確にする。
美智子妃・1959＝59歳：来日した経営学の権威ピーター・F＝ドラッカー教授が高く評価、肝胆相照らす友人となる。
安保闘争・1960＝60歳：業界の常識を破って無接点スイッチを開発、トランジスタ論理回路による自動制御装置に先鞭をつける。
TV宇宙中継始1963＝63歳：資本金の四倍を投資して、長岡京市に中央研究所を設立し、地位をゆるぎないものにする。
東京リビック1964＝64歳：121種の食券販売が可能な画期的自動販売機と紙幣両替機を開発。偽札発見機緊急開発の依頼にも対応。
“地域社会への奉仕”の心から、地元資本の参加による利潤還元を考え、ネオ＝プロデュース＝システムという地方分散の知恵を編み出す。科警研から開発依頼された車両検知器の実験に成功。

大学紛争始・1965＝65歳：2年前に*米国視察に出張して得た情報から、クレジットとデポジットのカードシステムの開発に成功し、大きく報道され、のちに、CDやATMとなって金融機関の業務に画期的変革をもたらす。国鉄神戸駅に多能式自動券売機として納入。近畿日本鉄道と共同で自動改札装置を開発。
美濃部都知事1967＝67歳：3年後の大阪万国博覧会の開催のために新設された阪急電鉄北千里駅に世界初の無人駅システムを実現。
「サイバネティクス」の副題“動物と機械における制御と通信”に心ひかれ健康工学の構想を暖めていたことが株式会社ライフサイエンス研究所を設立に実を結び、“サリドマイド児に手を与える運動”を展開する畿圏のライオンズクラブから義手の開発依頼を受けると、徳島大学医学部整形外科との協力体制をとり、一年余りの歳月を経て開発に成功、感動的な場面は、NHKテレビ{あすをひらく}で“放送され、社会的に高い評価を得る。2年後、この研究により一真は徳島大学から医学博士号を受ける。

大阪万博・1970＝70歳：初めて欧州で転換社債を発行し、社名変更の必要を感じる。
ドルショック・1971＝71歳：中村裕と秋山ちえ子から重度身体障害者の社会復帰のための専門工場建設・運営の援助依頼を受けると、
日中国交回復1972＝72歳：困難ななか、オムロン太陽電機株式会社を設立し操業開始。創業以来の黒字健全経営を続ける。

石油ショック1973＝73歳： 革新大敗北・1979＝79歳：売上一千億円達成を機に、社長の座を長男に譲り、会長に就任。さらに先見性、洞察力を高め、
1981＝81歳：

デイト・ニューハット1983＝83歳：創業50周年を機に、大企業病の克服への挑戦を指示、本質を鋭く突いた“大企業病”の語は一般にも定着。
創政会旗揚げ1985＝85歳：その思想とその実践は“永遠なれベンチャー精神”のタイトルで出版され、
バブル始・1986＝86歳：本社がある地元京都に京都オムロン太陽電機を設立創業して、多くの重度身体障害者に働く場を提供。
リクルート事件・1988＝88歳：取締役相談役に就任。

昭和天皇没・1989＝89歳：まず中国語版が出され、続いて英語版、
ドイツ統一・1990＝90歳：ロシア語版でも発刊され、世界で読まれる経営書となる。立石電機が{オムロン}への社名変更を支えるとともに、私財を抛出して立石科学技術振興財団を設立して、
ソ連崩壊・1991＝91歳：没した。

インターネット「OMRONホームページ」